

学生逃げ歩き記

(その3—最終回)

元防大銃剣道教官

兼坂 弘道 陸自55

ソ連軍に収容される

ソ連兵が逐次守備隊内に入るようになり、時計や満洲紙幣を強奪する事件が多くなった。「チアスイ・イエス(時計はあるか)?」と探しまくっていた。

「ジェンギ・イエス(お金あるか)?」「ニエート(ない)」「スターチ(立て)」「サジース(座れ)」「ヨツポエマーチ(馬鹿野郎)……」「アジーン・ドワ・トリ……(1・2・3……)」等のロシア語を覚えた。

日本兵も私たちも一緒の、人員点呼が始まった。日本式に並べて番号をかけ、列の数だけ掛ければ簡単に済むはずだが、ソ連の将校が「アジーン・ドワ・トリ……」と1人ずつ数える点呼で、時間がかかる。日本軍の将校が「日本式にやれば早い」と言うが、ソ連軍のカピタン(大尉)が承知しないので、長時間立たされたのには閉口した。私たち中学生の中には体調不良で倒れる者も出始め

た。安達君たちは病院に後送され、彼はその後現地で帰らぬ人となった。ここにきて数日経った8月末頃、私たちは馬蓮河という所に移動させられた。そこは久田見開拓団が住んでいた所で、開拓団の人たちが立ち退いた後、義勇隊の人たちが集められていた。私たちはその倉庫のような建物に入れられた。

義勇隊員同士の勢力争いがあちこちで頻発していて雰囲気は最悪であった。日本軍の軍刀を杖代わりにして歩くソ連兵の意地悪そうな伍長(「シベリア狐」と呼んでいた)がいた。私は彼が回ってきたとは知らずに小石を蹴ったところ小石が彼の前に転がったので、彼はものすごく怒り、殴らんばかりの剣幕であった。謝っても通じないようなので、咄嗟に「バツカヤロウ!」とアクセントをつけて言い頭を下げたら、これが効果的で、彼の態度が変わり言葉が柔らくなったので溜飲を下げた。が、このような機会は二度となかった。その後、この話を聞いた中尉の通訳が来て、謝るのは「イズビニーチェ」だよと教えてくれ、「泉の姉ちゃん」と覚えておきなさいと言われ、これを上手く利用したのを覚えて

ている。これも捕虜のレジスタンスの一つかも知れない。

ソ連兵による年齢の調査があり、18歳以上は別の場所に行かされることになった。シベリアかも知れないという噂が飛び交った。斎藤教官が私の横で「私も15歳と言うか」と言われたので、「それが良いです」と言い、ソ連兵に「ピヤトナツツ」と言ったが、ソ連兵から「その髭面で15歳はない」と言われた。私も15歳と答えたところ、身体が大きいので18歳以上に入れられそうになったが、学生全員が彼は15歳だと訴えてくれたので助かった。しかし、斎藤教官は18歳以上のグループに入れられた。引率者と離れ離れになる心細さと、これからどうすれば良いのかという不安と悲しさが交錯する別れとなった。(斎藤教官は12月まで牡丹江で作業をさせられていたが、体調を崩されたので新京に帰ってこられた)

馬鈴薯掘り作業

9月10日頃、身体の大きい者20余名の中学生と義勇隊員20名が選び出されて異動させられた。私もそのグループに入り、行き先も教えられず

に平頂山(一文字山とも言う)の南の方に連れていかれた。そこも開拓団の跡地で、分教場の講堂のような建物に入れられた。そこには中国人の保安隊という腕章を付けた人相の良くない数人がいて、そのリーダー格で最も人相の悪い男がいきなり片言の日本語で「お前たちの親父が俺を苦しめた! 見ろ、この喉の傷を! これは殺されかけた傷跡だ。今度はお前たちをやつてやるから覚悟しろ!」とまくし立てた。驚いたのは我々の方で、とんだところに連れてこられたものと恐怖感のどん底に陥った。中には恐ろしさに震えている者もいた。そこにソ連軍の大尉が来た。彼の名はカピタン・ニコライである。彼はいきなりくだんの中国人を怒鳴りつけ「バジヨーム!」と言って追い出してくれた。まさに地獄に仏で、皆、安堵の胸を撫で下ろした。

このカピタン・ニコライは笑顔に変わり、これからは馬鈴薯掘りの作業をしてもらうということでホッとした。40数名は本当に助かった気持ちになり笑顔が戻った。そこで彼方此方の馬鈴薯畑を掘り起こした。掘ったジャガイモはGMCトラクタ

で運び、ソ連軍の食事に使われたようである。作業の警備はソ連軍の若い兵士で、彼らと段々と気軽に話を

するようになり、休憩時間には自動小銃の扱いまで教えてくれた。休憩の時には私にボクシングをやらぬかと頻りに誘うのだが、私はボクシングはやらないので断っていたが、しつこく言うのでやることにした。

私は殴るより投げ飛ばす方が得意なので、彼が殴ってくる腕を掴み腰投

げで倒してしまった。彼は悔しそうに「ヨツポエマーチ（馬鹿野郎）」と機嫌悪くブツブツ言いながらその日は終わった。翌日も同じ作業で彼

が監視員であるが、今度は大きな伍長が古ぼけたボクシンググローブを持って来ていて、例の上等兵と話を

して、どうも私を指差しているようだ。伍長が私の処に来てグローブを付けてと言うが断った。それでも付けてるといので渋々付けてやる羽目になり、今度は滅多打ちに叩かれて負けた。伍長と上等兵は得意満面である。癪に障ったが我慢しなくては

ならない。後で上等兵は機嫌取りに

来て何か喋って行った。それから

は仲良く過ごした思いがあ

る。自動小銃の分解手入れや近くの野良犬

を撃つのを手伝ったりした。変な勝者

と負け少年の出来事であった。皆で相談しカピタン・ニコライに「ごますり」をしようと言うことにな

った。朝の集合で私が「ドープロ

エ・ウートロ（おはようございま

す）」と言った後に全員が「カピタン・ニコライ、ウラー・ウラー（ニコラ

イ大尉、万歳・万歳）」と唱えた。大尉は吃驚したが嬉しそうな顔をして「スパシーボ（有難う）」「今日は

作業を止めて皆休んでよし」となり、「ごますり」は成功した。彼は私を呼んで頭を撫でながら「ウイ・コマ

ンジール！」と言うが、何の事か分からず、「我慢しろ」言ったようだが何だろ

うと相談したが、誰か英語の辞書をめくり、「コマンジール」は隊長のことであろうということ

で落ち着いたことがある。義勇隊の連中は「月の塹壕に歩哨に立てば、離

れて遠き故郷を、偲べと言うて鳴いて

いる、月の夜更けの渡り鳥」という歌を唄っていた。

食事は高粱と野菜を混ぜた雑炊のよう

なもの配られていたが、量が少ないのでその旨をカピタンに訴えたら、五右衛門風呂の釜を持って来て

それで馬鈴薯を煮て食べるように

してく

れた。風呂釜の底に石を敷き

詰めて水を沸かし、これで馬鈴薯・

南瓜等を茹でて空腹を補った。窮すれば

通じたものである。ソ連兵とも親しく

なり、彼等はマホルカという

刻みたばこを、プラウダ等の新聞紙

の端で巻いて吸っていた。まずそう

に見えたので、私たちが持っていた

英語の辞書の紙をちぎって「この紙

でどうだ」と渡したら、紙の質が良いので喜んでいた。それから毎日「ア

ジン・ダワイ（一枚くれ）」と言

ってくるので、ただでやるのも癪であ

り、「プレーブ・ダワイ（パンをくれ）」

と言うと、酸っぱい味の黒パンを一

切れくれたものである。このことは

新

京に帰り着くまで続き、帰って

みると辞書は表紙のみとなっていた。

再び東京城収容所へ

9月に入ると夜はかなり冷え込ん

できたので、寒くて寝られないと訴

えたところ、付近に積んである粟の

藁を床板に積んで寝床を作るように

指示された。これで寒さを凌ぐこと

が出来たが、まるで馬並みの扱いで

あった。しかし、これによって虱の

発生が増えたが、発疹チフスが発生

しなかつたのは何より運が良かった

ことである。

芋ほり作業が終わり、東京城の収

容所に引き揚げて見ると、久多見収

容所の学生も、ここの収容所義勇隊

の隊員は1000名以上もいたが、

相変わらず暴力沙汰は続いていて、

中学生の100名ばかりの者は彼ら

の横暴な態度に悩まされていた。彼

らに殴られたりすることが悩みの種

であった。義勇隊員では新入生を初

年児と呼び最上級生を古年児と呼ん

でいたようで、古年児が新年児を虐

めることは目に余るものがあり、初

年児が私たちの処に「助けてくれ！」

と転がり込んできたので、私は無謀

にも古年児の処に出向き、「同じ日

本人同士で暴力はやめよう」と話

に行ったところ、数人の古年児に「か

ばちをたれるな！」と殴る蹴るの暴

行を受け、文字通り半殺しの目にあ

い、這いながら自分たちの部屋に

帰ったことがある。皆が心配してく

れて看病してくれたことは未だに忘

れられない出来事であった。「かば

ちをたれるな！」は広島県の方言の

ようであった。

9月末に田原君と松田君が脱走に

成功し、牡丹江方面に逃げた。「上

手く新

京に帰ればよいがなあ！」と

心配した。ソ連兵にはまだ知られていないようだ。勇気のあることをしたものだと思つた。

何となく、私たちはここで越冬させられそうだとの情報の流れ、落胆したが、こうなると義勇隊員は生活力旺盛で、駅付近にある枕木の廢材を持ち込み越冬準備の燃料を確保したり、窓ガラスを泥で塗りつぶしたりして良く働いていた。我々学生はただそれらの動きに見とれているだけであつた。真冬ともなると井戸は凍るだろうし、夏姿で東寧を脱出したので衣類にも困るし、暗澹としていた。作業もあまりないので、施設内に放置してあるアルミニウムの電線を盗んできて、手製のフォークやスプーンを作り食事に使つた。その名残を岩崎君は記念品として今も大切にしているようだ。

この頃になると病人が増えてきた。石川君、杉君、中沢君、野辺君達は相当弱つていた。手当のしようがなく困つたことだ。当時の私たちの服装はカーキ色のやや薄手の夏服に略帽子で履物は殆どが地下足袋、運動靴の粗末な物であり、所持品はリュックサックに簡単な衣類、わずかな教科書、辞書と少しばかりの食

糧を入れており、飯盒、時計、万年筆等はソ連兵に取り上げられていたので、食器としては空き缶に針金を通した粗末なスタイルであつた。私は収容所から解放される前に、義勇隊の宿舎にあつた麻袋（マータイ袋）を盗んできたが、これは爾後の行動で寒さを凌ぐのに大変役立つた。

解放、そして帰路に

10月10日、私たちに解放の指示が出された。学生は北の牡丹江方面に向かつて歩き始め、義勇隊員は南の延吉方向に向かつて移動し始めた。中沢君、野辺君は歩行困難なため東京城に残しての出発であり、後ろ髪を引かれる思いがしたが、兩名の命の保持が大切であり、止むを得ない措置である。ソ連軍の証明書を古畑君が持ち、私は1班を纏めて歩き始めた。義勇隊員の連中と別れ、彼らに干渉されることがなくなつたので、晴れ晴れとした気分足の足並みであつた。8月に通つたことのある線路沿いに石頭鎮（現在の石岩鎮）に向かつて歩いたが、あの時は再びこの道を歩くとは思ひもしなかつたが、変わり果てた姿での再訪問となつた。

街中でソ連軍警備兵のチェックを受け、その都度古畑君が証明書を示して歩き続けた。夕方になつたので街中の民家に分散宿泊することに泊めてもらうことになつた。この家の夫婦は親切な人で、まるで親戚の人が泊りに来たかのような歓待であつた。夕食は粟の食事で、私が炊き始めたところ、それは違うと言つて主人が炊き直した。彼は釜にお湯を沸かしたところに粟を入れ、かき回して蓋をし、暫くして蓋を取ると、ふつくらとしたご飯ができていた。これと豚肉のおかずを受けて食べた。他に邪魔されることなく伸び伸びと寝ることが出来、翌朝お礼を申し上げて牡丹江に向かつて歩き始めた。私たち以外のグループも同じような歓待を受けたと聞いている。道はソ連軍のGMCトラックが砂塵をたてて走つてた。夕方近くに蘭崗に着き、民家に分宿した。私たちは朝鮮系の人の家に泊めてもらったが、土間に寝たことぐらしか記憶がない。

翌日はいよいよ牡丹江市に着くと心弾ませて歩いたが、寧安市でストップをくらい、牢屋みたいな建物に入れられた。途中では、地元の子供たちから石を投げられる嫌がらせを受け、不安になつた。収容所には日本兵が20人ほどいたが、敗残兵のようなだらしのない兵隊で、中には松葉杖をついて歩く人もいた。新京の桜木小学校の先生も招集されていた。先行きが心配になつてきた。家の周囲は土塀で囲まれ脱走は困難な状況である。2日目も何の進展もない。新京に帰ることはできるのか？どこか他に連れていかれるのか？心配の種は尽きない。3日の夕方近くになつて「今から移動するので準備を急げ」との指示が出た。出発準備は簡単なので、直ぐ出来た。そこに収容されている兵隊も一緒にある。

いよいよ牡丹江への移動が始まつた。松葉杖の兵士は馬車に乗せられて随行した。今度はソ連兵数名が警備のために同行している。温春付近で薄暗くなり、護衛のソ連兵も疲れてきたようである。彼らは道端にあるトウモロコシ畑に入り、トウモロコシをもぎ取り、生のままポリポリ食べるのには驚いた。向日葵の種もよく食べていた。暗くなつてくると段々と行進長径が長くなり、救急用

の馬車は松葉杖の兵士を降ろして帰ってしまった。松葉杖の兵士は相当疲れてきたようだ。夜中になって小休止で休んでいた時に後方からパン・パンと小銃の発射音がした。件の松葉杖の兵士が射殺された模様である。これを感じた私たちは、恐ろしさや緊張の極みに達した。「遅れたら殺される」の意識が広まり、「最後尾になると殺される」と思い、必死な気持ちでピッコを引き引き歩き、海朗を通り、液河^{えか}付近の台地の所々に兵士らしい死体が放置されているのを見ながら、「ああ日本は負けたのか」という侘しさに誘われた。一晩中休憩なしに歩いたため、疲労困憊の状態であった。

液河で大休止をして大きな川を渡った私たちは、腹ペコ状態に加えて足のマメの痛みや疲れの極みに達して市内を歩き、牡丹江神社の裏の公園のような場所に着いた。ここには日本兵が一杯収容されていて東京城の比ではないようだ。これくらい多く集まらなければ大丈夫であろうと思った。陸軍少佐の方が来られ、私たちのこれまでの事情を聴かれ、慰めていただき、「腹が空いたのであろうから、今からスイトンを作るの

で食べなさい」と言われ、「それにしてその頭の髪は何とかならないか」と言われ、兵士に刈ってもらったことになった。私は何かの都合で刈ってもらったチャンスを失い、イガグリ頭のままとなったが、刈ってもらった者はトラ刈りではあったがすつきりしたようだ。大きな野戦釜に一杯のスイトン汁が届けられ、皆で美味しくいただいた。本当に美味しかったし疲れもすつ飛んだ。食後は今までの苦勞が消え去り、ゆつくり休むことが出来た。兵士の話によると、あの少佐は有名な政治家の子弟であるらしい。私たちと同行した兵士とはここで別れた。原隊に帰ることが出来て安心しただろう。

ソ連軍では私たちが新京に帰るところを認めたらしく、午後牡丹江駅に行くことになった。駅まで引率するのはソ連軍の下士官の年配の軍曹で、親切な人のようであり駅で別れないので次の列車を待つことになり、付近の日本人住宅に分散して待機した。古畑君は日本人会に行つて調整に当たつた。彼はバイタリティーもリーダーシップもある、頼り甲斐のある男である。日本人会か

らは一人5円の見舞金をいただき、皆に配られたと言うが、私は未だに貰つた記憶はないが、何か別なことをしていたのかも知れない。どさくさに紛れてそのようなことも起こるのである。後日談だが、古畑君とは帰国後も付き合ひ、有楽町辺りでよく飲んだものである。

17日には汽車に乗ることが出来ず、駅のホームに屯^{たむろ}して次の機会を待つことになった。焚火をして暖を取りながら列車の来るのを待つていると、私たちのグループで突然「バーン」という爆発音が起こり、大騒ぎになった。焚火の中に小銃の薬莖が混じつていて、それが爆発したらしい。怪我人が出なくて良かった。翌

18日早くに貨物列車が入ってきた。列車の色は茶色の無蓋車で、連結器の左右にラツパ状の緩衝盤が付いていたのでソ連製かも知れない。木材を運ぶ貨物列車のようで、動き始めると先頭の方から「ガタン…ガタン」と衝撃音が伝わってきて、その都度皆で身を固めて座っていた。車枠は50〜60センチの高さしかなく、寒風が身を襲つた。哈爾濱行きだが、ダイヤが決まっていないようで、途中の駅で長く停車し、発車が不規則なのに

はイラつかされた。小便をする時は車枠に膝を当ててするが、出るはしから霧状に飛び散り、正に天龍下ればしぶきがかかるの歌同然だ。一面^{いっぺん}波駅ではソ連兵が乗り込んで来た。また服装検査かと緊張したが、ピラを配っていた。「日本共産党徳田球一の出獄記念人民大会が開催された」旨のゲラ刷り新聞である。初めて聞く名前である。

無蓋車の夜行列車はこのほか寒さが身に染みる。私と諸藤君は東京城で盗んだマータイ袋に下半身を突っ込んで座るので幾らか防寒の役に立つたように思った。寝袋(スリーピングバッグ)の発想である。行き交う貨物列車には日本兵が乗つてい

た。停車中に話しかけられ「君たちはどこに行くのか」と聞くので「新京に帰るのです」と言うと、「俺たちはウラジオから日本に帰るのだ」と異口同音に答えていた。列車内からは朗らかな歌声も聞こえていた。この人達は騙されてシベリアへ送られ苦勞したことは後で分かった。翌朝早くに哈爾濱駅の手前の香坊^{こうぼう}駅に着いたが、哈爾濱に行くものと思いつつまだままだと、列車が反対方向に動き始めたので皆は慌てて

飛び降りたので、中には足を痛めてピッコを引きながら歩く者もいた。哈爾濱市に詳しい者を先頭に、空っぽ同然のリュックサックを担ぎ、汚れた服装で、空き缶で作った飯盒をぶら下げ、破れた地下足袋をはいた100名ほどの学生が歩く様は、さぞや異様な集団と見えたことだろう。長道を歩くには、地下足袋は底が薄くて不向きである。やはり軍靴のように底が厚く固い方が良さそうだ。オペリスク調の忠霊塔の側を通り、花園小学校、中央寺院の横を通って駅に着いた。5月に見た中央寺院は焼けて跡形もなかった。駅前の広場は露天商や避難民の雑踏であり、日露戦争時に銃殺された「沖・横川の記念碑」も壊されていた。私と諸藤君は残り少ない衣類を種にしてご飯と豚汁にありつき空腹を満たした。古畑君は新京行きの列車探しに奔走していて、暫くして皆を集合させ、午後長春行きの列車が出る、それに乗せてもらえろという朗報である。無蓋の貨物列車2両の割り当てであるが、車枠も高く寒風もある程度防げそうである。車体は黒色の満鉄マーク入りである。「新京」が「長春」に変えられているが、いよいよ

家に帰れそうだ！ 皆の顔色に明るさが見えて来た。松花江の鉄橋を渡り、陶翰昭を過ぎて朝早く徳恵に着いた。ここでは前の貨車に中国人が乗り込んできて、所持品を強奪する騒動が起きていた。私たちの貨車には来なかったが、めばしい物がないことが分かっていったのだろう。



新京に着く

朝早く東長春駅について帰心矢の如き私たちはここで下車し、線路伝いに長春駅まで歩いた。駅は5月に出発した時のままであるが、駅名は「新京」から「長春」に変わっていた。「満洲」の国名も消えていた。駅前広場で古畑君が「これで解散する！」と宣言し、「もし身よりのない者は明日8時にここに集まること」とし

た。私は大切にしていたマータイ袋をネタにしてご飯と豚汁に交換し、諸藤君と2人で食べて自宅に向かった。途中、西広場小学校、敷島高女、海軍武官府、防衛司令部等を経て、與安橋、新京第一中学校前を通り、今まで見たこともない日本人の露天商の姿に、「何だこれは」と思いながら、陸軍官舎までの家路を急いだ。

いいから、明日先生の処にでも行って見なさい」と言うので、泊めてもらった。避難者も生活が苦しいらしく、苦勞話をしていた。私たちが長居をできる状況ではない。翌朝、薄暗いうちにここを出て、緑園住宅の先生宅を探しに行った。私の担任は鎌田喜一郎先生で、探しているうちに物理担当の津田先生に

家に近づいて様子が変わっているのに気が付いた。倉庫があったがそれがない。周囲をソ連兵が守っている。恐る恐る近づいてソ連兵に「ヤー・ドーム(私の家だ)」と言ってみたところ、いきなり自動小銃を空に向けて「発「バーン」と撃ち、「パジョーム! (出ていけ!)」と怒鳴られた。吃驚(びっくり)たまげ跳んで逃げた。側の原っぱに座り、「あー俺は独り、孤児になった」と思い、考え込んだ。しばらくすると小川隊にいた海老名君と会い、自分の官舎は少し先にあるので行ってみようと言うので行ってみた。そこは北満から避難してきた人たちの収容地となっていた。彼は「ここは私の家です」と言うと、「私たちは北満の開拓地から来て、半月前にここに収容された者で、そう言われても困る」「今日はここに泊

さった。鎌田先生宅に行く」と「よお! 弘道君か、大変な苦勞だったろうな、よく帰ってきた!」と歓待された。「ああー、孤児にならなくて良かった」と思った。先生の奥さんが「そこで全部脱いで風呂に入りなさい。服類は汚れていて虱もいるかも知れないので全部焼きましょう」と言われて捨てられた。海老名君も一緒であるが、彼は転校してきたばかりなので馴染みもなく、総て控え目で小さくなっていたようだ。朝ご飯に味噌汁が出て嬉しかった。衣類はすべて先生の物で、「弘ちゃん、良く似合うわよ!」と奥さんに押掬(おつか)われ、以来「弘ちゃん」呼びとなった。先生のお宅には2週間ほどお世話になっていたが、父の友人の兼坂家に移った。鎌田先生とは日本に引き揚げ後

もお付き合いをさせていただき、お住いの秋田市にも伺った。先生は天皇家の御陵を研究しておられた。

新京の官舎にはソ連軍が帰国した後、また行ってみたが、今度は中国人が住んでいたので訪ねて見た。こゝは私の家であったと尋ねたところ、「それがどうした」とすごい剣幕で言われ、取り付く島もなく退散した。窓際に父が愛用した灰皿が見えたが、持つて帰ることが出来ず、残念な気持ちで去らざるを得なかった。その後、もう一度訪ねた時には、焼け壞れて哀れな残骸が残っていた。仕方がないことである。

終りに

最後に私なりの結論を述べてみよう。約5カ月にわたり、ある時は泥水をすすりながら畑の野菜を生でかじり、ある時は野原に伏して寒気と労苦に耐え、新京に帰り着くことのみを目標に頑張りぬいて来たのであるが、ここで見逃すことのできない重要な要素は中学生の団結心であったように思う。団結心醸成の基礎は、構成する一人一人が共通の理念に基づく精神的共感の度合いと、深い友情に起因するところが極めて大きい

のではないかと思う。当時の状況において、全員が元気で新京に帰着しようという共通の目標に向かつて、衆心を結集することによって精神的共感度を高め、学生相互の切磋琢磨によって深い友情を築き上げ、ともしれば悲観的となるような悪条件下においても、主動積極的に行動することによって生き甲斐を見出し、その目的を達成し得たのである。もし仮に、東寧出發以降、個人個人で単独行動をとった場合、その犠牲は測り知れないものがあつたのではないだろうか。

120名のうち、4名の犠牲者が出たことは誠に残念な事ではあるが、大部分が無事に新京に帰ることができたことは、当時関係された方々や現地（石頭、蘭崗）の人々の物心両面にわたる援助と、悪条件においても沈着冷静に指導された斎藤先生、帰校連絡用務でたまたま新京に戻っておられたために心無い批判に耐えながらも学生の帰還について東奔西走された小川先生、私を我が子のように迎え入れて下さった鎌田先生並びにご家族の方々、道端で私を見つけて下さった津田先生、野倉先生、歩き続ける間における天地自

然の恵みに感謝して、駄文を終わりたい。

今感じるのは、国の安全には「あつもの羹に懲りて膽を吹く」ばかりだけでなく、牙には牙で備えるだけの手立てをしておかなければならない、ということである。三八式歩兵銃（5発）では、自動小銃（PPSh40）には勝てない。肉薄攻撃でT34戦車には勝てない。精神力だけで制空権のない戦いには勝ち目はない、という戒めを肝に銘じておくべきであろう。